



嶋岡晨・大野順一・小川和佑 編

戦後詩大系

IV

三一書房

戦後詩大系 IV

定価 三、〇〇〇円

一九七一年二月十五日 第一版第一刷発行

編者 嶋 大 野 岡
順 一 晨

発行者 田 小 川 川
敬 和 佑 吾

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三三三―五番

振替東京八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 文栄印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所

©一九七一年

戦後詩大系

Ⅳ

目次

ハ
ウ

林 嗣夫……………13

詩集「教室」から

小さな詩

卒業式

笑いのまま

五月

六月

教室・雨

樹

顔

先生賛歌

長谷川龍生……………23

詩集「パウロウの鶴」から

パウロウの鶴

鉄のアイディア

カムリツクン鴨

詩集「虎」から

恐山

浜田知章……………33

「浜田知章第三詩集」から

ハムシン

血の収穫

体温

テロリスト気質

真夏の処刑

安保闘争・六月行動

地底徘徊コンミュニオン

骨肉を断つ

平井照敏……………44

詩集「言語論」から

石のことば

ヘレン・ケラーの言語論

つまのあがめるもの

合掌ということば

平林敏彦……………53

詩集「種子と破片」から

声

運河の夜

死について

影の部分

美術館で

ひもじい日日

魚の記録

橋

平光善久……………63

詩集「骨の遺書」から

骨を編む

匂いの影絵

炎える小鳥

鳥が歩く

飛翔の日

歩行者の哲学

義足がとぶ

富士一男……………72

詩集「重い歌」から

領地

願望

涙

光と都市について

告別の歌

重い歌

幻影風致区

無言歌

その神の眼の下で……

蘇生

詠唱

福永武彦……………80

詩集「ある青春」から

ひそかなるひとへのおもひ

続・ひそかなるひとへのおもひ

鉄橋にて

風のまち

眠る兄のための五つの歌

「マチネ・ポエティック詩集」から

火の鳥

物語

詩人の死

「福永武彦詩集」から

死と転生

I

II

III

IV

富士正晴……………91

「小詩集」から

身投げ

やうつり

春はもう

Is: M. G. Company, 2nd Class Private
said.....

立春

賈訳陶淵明

いいわけ

賈旅券

一九四六年の詩

ぶらんこ

年年のクリスマス・イヴ

藤富保男

詩集「是非の帽子」から

一人の人間のなかの孤独は

悶々とした自由

氣味が悪い詩論からのメッセージ

不明の彼方に見えるもの

藤森安和

詩集「十五歳の異常者」から

十五歳の異常者

嘔吐

あら。かわいらしい顔。

夜空の子

ガンバルノダ心臓よ。殺意だ。パ

ンチだ。

「やっちまえ、やっちまえ」

笑うな。ぼくは真剣だ。

性の逢びき

古川史子

うまれた。かわいそう

詩集「三月の雪」から

亡父へ

三月の雪

弟に

山になったひと

奥秩父雁坂峠への夜

北八つ岳

樹に

さくら

書物

中国古陶器三題

堀内幸枝

詩集「紫の時間」から

紅い花

樫の木と茶梅の話

曼珠沙華

詩集「不思議な時計」から

想い出

初秋のころ

詩集「村のアルバム」から

市之蔵村

春の雲

村の春

蕎麦の花

村のアルバム

葡萄棚

夕ぐれ

山の夕
靄から

詩集「夕焼が落ちてこようと」から

夕焼が落ちてこようと

ひなの日は

雨の日の小景

堀川正美

詩集「太平洋」から

声

想像力の休暇

必要なもの

経験

太平洋

書物の教訓

日本海六〇・飛島にて

伝説の一章

夜のへり

堀田善衛

「現代文学全集」から

戦争

しづかに雪が

野辺

風

暗い夜道で

ノエスフィールド公園にて

哀歌

海景

現代史

潟の風景

堀場清子	163
------	-----

詩集「空」から

八月

道

未刊詩集から

じじい百態

ズボンにかんするながいものがたり

バイオニアをめぐる考察

章造

詩集「疎」から

群衆

礎

雨

おとなしい狂人

晩鐘

空の網目

詩集「虹の手帳」から

グスベリと少年と鰯

北辺の鰯

摩周湖

別れの曲

詩集「罨」から

魔の冬

牧 羊子

詩集「コルシカの薔薇」から

河

街に葡萄色の雨は流れ

太陽の子

松田幸雄

詩集「一九四七—一九六五」から

崖の上の家

魂のシークエンス

(1) 目覚め

(2) 星の夢

(3) ねむり

落日

淋しい日曜日

A LONELY HUNTER

戦場

わが胸をして

季節が口をきいたなら

狼

冬野

松永伍一

未刊詩集から

坑夫

ゆうひ

誕生

墓地にて

水のなかのギター

道の上

呪われの鬼齒

幻鳥

麦藁帽子の海女

丸山 豊

詩集「愛についてのデッサン」から

愛についてのデッサン

三木 卓

詩集「東京午前三時」から

東京午前三時(抄)

三木 昇

詩集「雨の経緯」から

隙間(抄)

一自らの動き

三 自他者への動き

コンボジション

風物誌

三谷晃一

詩集「会津の冬」から

過去

破片

彼

戦場

病院で

止り木の上で

辺境

馬のタワシ

三井ふたばこ

詩集「後半球」から

傷ひらく

沼鳥
朝の地形
Sourire

みち

半生

池

領土

仮睡

詩集「空氣の痣」から

遠景

はなしがい

靈安室にて

ecclair

透かされた国

碧い童話(抄)

一つの影

かがみの国

表情

忘れ径

三好達治.....254

詩集「駱駝の瘤にまたがつて」から

沈黙

出発

駱駝の瘤にまたがつて

薄野

二重の眺望

行人よ靴いだせ

晩夏

さやうなら日本東京

ちつぽけな象がやつて来た
「三好達治全詩集」から

醉歌

三好豊一郎.....264

詩集「囚人」から

囚人

影 I

影 II

壁

幻燈

夕映

青い酒場

空

巻貝の夢

蜘蛛

詩集「小さな証し」から

魂

生命

秘密

引力

水尾比呂志.....275

詩集「汎神論」から

汎神論

博物館にて

考古館にて

塔にて

廢墟にて

瀟湘八景(抄)

水野 隆.....285

詩集「室内楽」から

幼い死

葡萄

相聞 I

相聞 II

詩集「夏の名残りの薔薇」から

木の歌

さすらふ若人の歌

シランクス

幽霊

詩集「奥美濃のうた・ふるさと詩鈔」

から

鳴石

郡上織のうた その一

郡上織のうた その二

家

水上文雄

詩集「廟」から

風花

李陵

愛鴛

春鶯

業春

夢薨

無鎮

莊薨

宮雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

影雲

南川周三

詩集「菟集癖の少年」から

山から

菟集癖の少年

美しい集会

童話抄

もしか誰かが

私を見る

入江にて

304

港野喜代子

詩集「紙芝居」から

疎開

蜂供養

秋唄

詩集「魚のことば」から

故郷の使者

風車

一つの町

怒濤の村

沃土

未刊詩集から

絵日記

旧約と新キャベツ

宮崎健三

詩集「北濤」から

耳

北の海

伊良子清白

影

蝶

山の野分

丘

泉

砂丘

悲歌

村岡

詩集「あいうえお」から

330

312

村田正夫

コスモス（抄）

詩集「バラ色の人生」から

バラ色の人生

サイゴンで最後だ

米軍施設登録番号FAC3005

明治百年記念切手考

ア・ラ・カルト⁶⁹

村野四郎

詩集「実在の岸辺」から

魚における虚無

秋の犬

ある時代の午前

現代の冬

黒い歌

詩集「抽象の城」から

岸辺の疑惑

さんたんたる鮫鯨

牛

詩集「亡羊記」から

夜の内臓

扉のむこう

青春の魚

鹿

盲導犬

肉屋のオルフェ

芭蕉のモチーフ

骸骨について

暗い雨のなかで

341

351

死

詩集「蒼白な紀行」から

蒼白な紀行

見ばえのしない犬

冬

青春

城

牟礼慶子

詩集「来歴」から

身許不明

満身創痍

霧の時代

問わねばならない

苦い風景

私たちの未来のために

遺産

明日は

不在の論理

落日

森崎和江

詩集「さわやかな欠如」から

血祭り紀行

蜜月

狐

安水稔和

詩集「存在のための歌」から

新年

詩集「愛について」から

君はかわいいと

君がほしい

愛の正体

詩集「鳥」から

鳥

今撃とうとする鳥に

鳥の話

魚

言葉

詩集「能登」から

千枚田

詩集「やってくる者」から

うたう

平和な歌

梁瀬和男

未刊詩集から

老い

弥生幻想

窓

晩秋の死者

花木哀歌

夏の草

冬の夢

つちいろの幻影

アメリカ

暗い夏

山口洋子

詩集「リチャードがいなくなった朝」

から

男に

さようなら

研ぐ

鱗

戯歌

岬

掘る

アタシノ鳥へ……

リチャード！

山崎栄治

詩集「葉と風との世界」から

見えないもの

青春

初夏の亡き母への祈り

哀傷歌

目撃

童話

山田今次

詩集「行く手」から

トレイラー

夜

貨車

こおろぎ

貨車（1）

貨車（2）

あめ

はと

すずめ

舞台

あの坂を

京浜労働者の歌

機関車

荷役

雨

山田正弘

未刊詩集から

若き詩人は否という

詩法

光栄について

冒険と象徴

南へいく

だが生きていることは良いことだ？

山本太郎

詩集「歩行者の祈りの唄」から

蛇蝎の唄

よいどれの唄

深夜の合唱

心動きみおやなる エオアン・ト

ロープスのおさに うつしよの

鳥啼なる わらべ一匹丸ごと捧

げる唄

「山本太郎詩集」から

ヴィナス失踪

讃美歌

かるちえ・じゃぼね

詩集「単独者の愛の唄」から

昆虫の微笑

讃美歌

吉岡実

詩集「静物」から

静物

過去

詩集「僧侶」から

僧侶

單純

聖家族

死児

詩集「紡錘形」から

裸婦

吉田一穂

詩集「未来者」から

泉

酒神

たましづめのうた

冬の花

天隕

楡

詩集「羅旬薔薇」から

白鳥

「吉田一穂詩集」から

暗約

非存

「日本の詩歌」から

ネガ・レアリテ

夜の座

鉄と混砂土と油

未生の花

北の門

吉野弘

詩集「消息」から

ひとに

詩集「幻・方法」から

ハミング

名付けようのない季節

記録

たそがれ

burst

謀叛

I was born

奈々に

詩画集「10ワットの太陽」から

乳房に関する一章

比喩の太陽

吉原幸子

詩集「幼年連禱」から

喪失ではなく

朝

道路

おとぎ話

じゃんけん

かくれんぼ

呪ひ

吊し柿

空襲

疎開の秋

初恋

詩集「夏の墓」から

逝く春に
これから

開花

吉増剛造

詩集「黄金詩篇」から

黄金のザイルは朝霧に……

変身

吉本隆明

「初期ノート」から

エリアンの詩

詩集「転位のための十篇」から

火の秋の物語

その秋のために

「吉本隆明全集著作集」から

時のなかの死

佃渡しで

吉行理恵

詩集「夢のなかで」から

墓場で

怖れ

星が流れて行ったなら……

悲歌

秋の葬式

都会の空で

月見草

詩集「幻影」から

柩の上

もう だれもないのに

思い出

鎖

そして とび出ていったから

足の裏が冷たかったから

波打際に

梨の花の揺れた時

しめられた扉の前で

靴に釘がささっていても……

鷺巣繁男

詩集「メタモルフォーシス」から

白鳥

凶兆

詩集「夜の果への旅」から

死者たちへの手帖

十字架降架

マリアの本（抄）

渡辺武信

詩集「夜をくぐる声」から

六月の問い

深夜劇場

どこにいるの？

暗視野

七月の視野

遠い囲い地

夜をくぐる声

夜の帆

夜の終りあるいは最後の唄

和田徹三

詩集「金属の下時間」から

倅せな蜜蜂たち

苦い風

流れる雲の下で

静かな歯と眼

白い鏡

夜の汀

朝の絵

夜の河

言葉のはざまから

鏡のなかの夜

ニュースの陰の暗がり

戦後詩史年表	戦後詩の展望	戦後詩史序説
小川和佑	嶋岡 晨	大野 順一
.....		
601	583	553

戦後詩大系Ⅳ

ハ
ー
ワ

小さな詩

ぼくは生徒らの性器を拾い集めて
町へ商売に出かけていく

性器は教室で集めるのが手間が省けていい
たとえばぼくがシャツの腕をまくり

冷たいアスタイルを踏んで教室へ駆け込むと

生徒らはのけぞり 足を震わせ 顔をゆがめる

ぼくはさっそく彼らの股を押し開き

弾力ある生きものの部分を一つ一つもぎ取っていく

股の奥に十指を突っ込み 引き裂き

すぎがあればすぐ生き残ってしまうこの醜い部分をつかみ出
す

引きちぎり 握りつぶしては

机のすみにたたきつけ 息の根をとめる

校長先生 父兄たち 見て下さい

こうして教室を占拠したぼくの姿を

足を震わせて笑う生徒らの頭のむこうに

世界は金属破片のように晴れている！

さてぼくは床にのびた性器どもを拾い集め

鞆へつめ 町へ商売に出かけていく

ジャズ喫茶で腰を振りつづける色白娘には

首にぶら下げるアイドル

幹部候補の若い紳士には寝小便の薬

①林 嗣夫②一九三六年③高知④高知大（教育
学）⑤詩集「教室」私家版（一九七〇）

車をみがくスポンジ　その他使いみちはアイデア次第

ぼくは工場へも売りさばく

叩いたり引き延ばしたりさまざま加工を施すのだ
売れ残りは家へ持って帰り

比較的形のいいのを選んでその一端に火をともし
妻と子供に童話を話して聞かせる

ところがときどきぼくはとんだ災難に会う
処分したはずの性器どもが復讐にやってくる

夕暮れの下水にそった道などで

突然かん高い声を空いっぱいに反響させ

世界のむこうから見覚えのある生きものがぼくを襲う

酸素を吸い取ってふくれ

不思議な風圧の波紋を押し広げ

イカの群れのように泳いでくる　影の百千

「身のほど知らずめ！」

ぼくはからだじゅうの爪という爪で性器どもを突き刺すのだ

が

そのまま心臓を凍らせて横たわる

ぼくのこわきにはさんだ検定教科書や

ポケットにふくらむチョークが

わずかに小さな詩となつてぼくの死体を照らしている

卒業式

生徒Aが卒業証書を受け取っていた

オルガンの奏楽が聞こえていた

先生の顔　父兄の顔が水のように何かを待っていた

生徒Aはしかししまだに眠り続けていた　しつかりした足ど

りで

めくれ上がった寝間着の下方にセックスがあったが

大きな校長印の卒業証書でそれをかくした

生徒Bが卒業証書を受け取っていた

壇上への階段がかたことと音をたてた

しかし生徒Bは制服制帽のまま逆立ちをしていた

そのポケットからこぼれ落ちるもの――

ビニール製の守り札

恋人の名前を彫り込んだ長い長い鉛筆

紙の袋につめた幾つかの生理用品　黄色いヘルメット……

生徒Cが卒業証書を受け取っていた

のぼした手は机の横を通り

校長先生ほか諸先生方の横を通り　式次第の横を通り

受け付けてきた来賓の腹をなで上げ

その腹や胸にはばらの花が満開で

レントゲンの白い巣のようにむこうの景色が透けていた

ぼくが立ち上がり卒業証書をもらいに行った

ぼくは両手を出した　なぜ卒業証書なのか